

黒板と白墨

21世紀教育センター長 大 関 邦 夫

ohzeki@cc.hirosaki-u.ac.jp

黒板と白墨は教室における情報伝達の道具として無くてはならないものである。小学生のころは、黒板に向かった先生の手からどのような文字が現れるかに大いに関心があった。中学生になると先生の板書をまねて、ノートに書き取る字が、先生が替わるたびに異なる字体となった。高校生になると自分の字体も決まって、先生の板書に左右されることは無くなったが、黒板の文字に先生の個性が映し出されることに興味を覚えた。大学生になって、上下に移動できる大きな黒板があることを知るとともに、教官により板書のスピードや文字の大きさにばらつきがあることに気が付いた。

マジックインキを手にしたのは大学院生のころであったと思う。当時は学会発表はビラにより行われていた。マジックインキは太くて大きな字を書くのに適しており、縦110cm、横80cmの模造紙を2枚張り合わせた発表用のビラをつくる際に便利であった。このビラを10枚もつくと相当な重さになり、しかもかさばって運ぶのが大変であったため、発表が終わるとさっそくビラをゴミ箱に捨てて、文字通り身も心も軽くなったことを思い出す。

そのうちに学会発表ではスライドが標準となった。スライド用の原稿を書き、接写をして暗室にこもり現像して焼き付けた。白黒のコントラストに苦心したがすぐに青焼きが主流となった。

レタリングセットを用いる原稿書きの腕前が上がったころには、学会発表の主役はスライドから次第にOHPシートに変わっていった。やがてパソコンとカラープリンターが行き渡り、カラフルなシートが一般的となった。さらに最近では液晶プロジェクターの出現により、部屋を暗くすることなしにスクリーンに映像を映し出すことができる。

近頃は講義に使う資料もパソコンとプリンターを用いて準備することが多くなり、あまり字を書かなくなった。通信文はさておき礼状さえもメールやパソコンで済ませてしまっている。電子文字の情報は文字の配列から表される内容そのものであるのに比べて、肉筆はその他に、書いた人の心情や人格までも浮かび上がらせる情報を与えてくれる。これまでの経験からすると整然とした文字で書かれた答案に得点が低いものはまず無い。下手な字で書かれていても得点が高い答案もたまにはあるが、汚い字で書かれた答案はおしなべて点数が低い。自信のない解答はしっかりとした字では表せないということであろう。

最近の新聞に文部科学省国立教育政策研究所の研究者が行った漢字の書き取り調査において、小学四年で習う「積む」を書けない高校生が五割近くに上ったことが報じられ、子供の国語力が崩壊寸前となっていることが憂慮されている。

情報通信技術の急速な発展により、自己表現の手段も時代とともに大いに変化してきたことはまぎれもない事実である。しかし、肉声と肉筆を用いた自己表現能力の後退はなんとしても避けなければならない。そこには自己が実在しているからである。

黒板はいつの間にか緑色に変わったけれども、白墨とのコンビでこれからも活躍し続けて欲しいものである。